ルソーとエマソン
—2人の思想の類似と相違—

浅　山　龍　一

はじめに

エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）の『自然（Nature)』（1836年）をはじめとするエッセーを読むと，そこに大胆に説かれた自然（法則）論，自己信頼思想，報償論，直感主義，人間中心主義，教会不要論といった思想が，ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の代表作『エミール（*Émile*)』（1762年）に見られる自然論等の思想に非常によく似ていることに気がつく。ルソーはこの書を出版したために教会の憤りをかい，（教会と結びついた）権力に迫害されて放浪の末に死ぬ。『エミール』は焚書処分。一方，エマソンは，旧態依然の教会に愛想をつかし，その保守性を糾弾する演説を最後に牧師を辞任（1832年)。その後，講演活動をしながら，上記のような主題のエッセーを次々と発表。アメリカの先鋭的思想家としての人生を送る。

2人の思想が相似しているのにもかかわらず，両者を比較する論文は見当たらない。米国エマソン協会の前会長 Wider 氏に問い合わせたところ，「2人の比較は面白い観点です」と返信をいただいた。（日本においては，1名の教育学者が関心を持っていた。*1）そこで，非力ながら，2人の比較を試みることにした。本稿で扱うテクストについて，はじめにことわっておきたい。まず，『エミール』は英語版を用いる。エマソンは『エミール』をフラ

ンス語の原本と英語版の両方で読んだようであるが，エマソンが読んだ英語版は手に入らないため，できるだけ原典に忠実と思われる，Allan Bloom の訳を使用する（彼は哲学者でもある）。また，エマソン作品は，*The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*（Modern Library Edition）のものを使う。『エミール』については主に，ルソーの自然論がよく表れている Book1 と Book4 を扱い，エマソン作品については，やはり彼の自然論がよく表れている『自然』,『自己信頼（Self-Reliance)』,『報償（Compensation)』を主に扱う。なお，引用部分の日本語訳については，今野一雄訳『エミール』と酒本雅之訳『エマソン論文集』を参考にする。

1．エマソンが読んだルソーの『エミール』と『告白』

Buell によると，エマソンはアメリカ合衆国において教育熱が高まった時代に生まれ合わせたという。古い教育法が批判され，ルソーからペスタロッチ，トマス・ジェファソン，フーリエに到る啓蒙主義者，ロマン主義者，社会思想家たちによるさまざまな教育論議があった時代である（310)。エマソン自身，ハーバードを卒業し，はじめは女学校の教員であったし，近所には教育者ブロンソン・オルコットがいて，ペスタロッチ的な教育を試みていた—詳しくは，娘のルイザ・メイ・オルコットが書いた *Good Wives*（1869 年）や *Little Men*（1871 年）を読むと，父ブロンソンが行っていた教育（個人の能力を引き出しながら人格の陶冶をする教育）の模様が彷彿とする。また，書生としてエマソンと同居することになる近所の青年ソローも，ハーバードを出たときは小学校の先生になった。当時のピューリタン教育に嫌気がさし，２週間で辞め，兄と塾を開く。その生徒の中にルイザ・オルコットがいたのである。

そういう時代状況の中で—エマソンの伝記を書いた Richardson によると—エマソンは 1821 年～ 22 年（18 歳～ 19 歳）頃，De Staël 夫人の *Lettres sur les ouvrages de Rousseau*（=*Letters on the Works of Rousseau*）を読んで，ルソーに興味を持ったのである（43)。

実際，エマソンの1821年3月（18歳）の日誌を読むと，『エミール』から次のような抜粋がある（*Journals, Vol.I*, 176)。

"Il n'y a que le mechant que soit seul" "Il n'y a que le bon que soit seul." Rousseau

Les plus sublimes vertus sont negatives.

Qui est ce qui ne fait pas dubien? Tout le monde en fait, le mechant comme les austres; -Emile p.191

エマソンのフランス語の書き写しの間違いは別にして，英訳すると次のようになる。*2

"Only the villain is alone." "Only the good is alone." Rousseau

The most sublime virtues are negative.

Who is it that does not do any good? Everyone does some good, the villain like the others. -Emile, p.191

ハーバードの卒業を目前にしたエマソンが，反骨精神のある多感な青年であったことが想像できる。

さらに彼の日誌を見ていくと—

1823年（20歳）の日誌には，「Rousseau, Voltaire, Montesquieu」と記載があり，注釈者*3のfootnoteに，「エマソンは1月16日から3月22日まで，ルソーの作品集（Oeuvres）18巻のうち，『告白（*Les Confessions*)』を含む第13，14巻をthe Boston Library Societyから借り出している」とある（*Vol.II*, 213)。フランス語のものを借り出しているわけである。

1824年（21歳）の日誌には，「ルソーの『エミール』を読む。子供の成長の観察はルソーにかなうものはいない」と書いている（同，308)。

同年の別のページに，「Montaigne & Rousseau & Shakespeare & Pope & others」（同，385）と記載がある。ルソーをモンテーニュやシェークスピア，ポープと同系列に並べていることから，理神論や汎神論に興味をもっていたことが伺える。

エマソンは，この年の12月に女学校を辞め，ハーバードの神学校に入る

準備を始めている。Richardson によると,「神学のための書物も多く読んだが,文学にも時間を費やした。…ギボンを読み,ルソーを読んだ。その効果が彼の書き物に表れ始めた」(58) とのこと。

1825 年 (22 歳) の日誌には「1 月 4 日火曜日…ルソーのエミールを□ページ読んだ。少しがっかりだ (a little disappointed)。バイロンの Conversations を 60 ページ読んだ…」「1 月 5 日水曜日…ルソーのエミールを 24 ページ読んだ。バイロンの Conversations を 70 ページ読んだ」(*Vol.III*, 365) と書いている。ルソーとバイロンという,激しい気性をもつ 2 人に惹かれていたようである。

1826 年 (23 歳) にエマソンに結核の徴候が出る。エマソン家は父も兄も妹も結核で亡くなっており,弟のエドワードもすでに健康を害していた。エマソンはアメリカ南部に転地療養の旅に出る。健康を回復し,1827 年にコンコードに戻る。16 歳のエレンに出会い,婚約に到る。エレンは自分の兄が結核で死んでおり,自身も結核を覚悟していたようである。1829 年 1 月にエレンが喀血。9 月に 2 人は結婚。しかし,1831 年に彼女は死ぬことになる。(Richardson, 86)

1827 年 (24 歳) の日誌には,「ルソーの信念 (principles) は,彼が自分の行動を律することができるようになる以前に損なわれていた (depraved) ようだ」(*Vol.VI*, 41) と記している。『告白』を読んでルソーの生活実態を知るエマソンが,『エミール』の中でもっともらしい教育論を並べるルソーをなじっている感がある。

1828 年 (25 歳) のはじめには,Richardson によると,「エマソンはルソーの病人に対する侮辱的な態度に不快感 (repelled) を感じていた」(86) という。たしかに,『エミール』の中でも,ルソーは病人を自然に適合できない者として冷たく扱うのである。当時,相次ぐ身内の病気を通し,迫りくる不幸の気配を感じ取っていたであろうエマソンの青年らしい反発は理解できる。

しかし,一方で,やはり Richardson が言うように,「『エミール』の散文はエマソンがそれまでに読んだ中でもっとも活力に満ち (vigorous),魅力ある

もの（attention-getting）であった」「その文体は abrupt で pithy で energetic で fluent，そして extravagant であり，エマソンが以前に読んだどの読み物よりも，（後の）エマソンの成熟した文体と似ていた」「そのテーマも，『人間は生きている間，ずっと，制度にはめ込まれている。何ものかになるためには，つまり，自分自身であるためには，人は言行一致で行動し，己れの進むべき道を知り，活力と執念をもってその道を進まねばならない』というもので，エマソンと一致していた」（86）のである。エマソンはルソーに惹かれていたのだ。だが，残念ながら，Richardson は2人の共通点や相違点についてこれ以上，述べていない。

1832年（29歳）9月に牧師を辞任。この時のエマソンの心境は，直前に教会で読まれた『主の晩餐（The Lord's Supper)』に詳しい。まさに，言行一致の行動であった。

1833年（30歳）にエマソンはアメリカを飛び出して，ヨーロッパ各地を旅行する。その最中，6月16日の日誌には，「ジュネーブ。ついに，カルヴァンやルソーやギボンやヴォルテールやスタール夫人やバイロン等の思想家がよく訪れた堅固な古き街にやってきた」（*Vol.IV*, 194）とある。ルソーをヨーロッパを代表する思想家の中に連ねていることが分かる。

同年8月24日に，友人の紹介で，イギリスの片田舎に（当時は無名の作家・評論家であった）カーライルを訪問し，人生観において意気投合。カーライルを "one of the most simple and frank of men" と讃えている。*4 そして，8月26日の日誌に，「T. C.（=Thomas Carlyle）の読書は多方面にわたる。…（彼によると，）ルソーの（正直な）『告白』は彼（＝ルソー）が思ったほど馬鹿（an ass）でないことを教えてくれた（とのこと）」（同，220）と書いている。"an ass" とはひどい言葉であるが，カーライルの frank な性格がよく出ている。*5

そして，同年9月3日に，アメリカに帰国する船の中で，「神はすべての人の中にいる（God is in every man)」（同，84）という言葉を日誌に記すのである。これについては次章で述べる。

さて，1835年（32歳）の日誌に「ルソーはDiderotに，“Je défie un coeur comme le vôtre d'oser mal penser du mien.” (=“I defy a heart like yours to dare to think ill of mine.”*6）と書いている」（*Vol.V*, 32）と記している。ルソーが親友ディドロ（ルソーを思想家として世に送り出したといえる人物）にさえ見せる挑戦的態度に共感するところがあったのだろうか。

1836年（33歳）の日誌には「Encyclopedists … Rousseau … Voltaire」（同，202）と書き，ルソーをフランス革命の誘因となった啓蒙思想家たち（百科全書派）の中に位置づけている。『百科全書』を中心的に編纂したのがディドロであった。

この年にエマソンの『自然』が発刊される。

この頃（1824-1836?）のものとされる，何と，“Encyclopedia” とタイトルをつけたメモ帳にエマソンは「人間はよいものだ。しかし，集まると悪くなる（Man is good, but men are bad)。ルソー」（*Vol.VI*, 127）と書いている。そして，後述するように，エマソンの『自然』の中にもこの考え方が見られる。

1837年（34歳）の日誌には「ルソーの言葉。“It is not permitted to a man to corrupt himself for the sake of mankind.”」（*Vol.V*, 393）と記している。ルソーが『エミール』の最初に「人間は堕落している」と書いているのは有名であるが，ここにこのように記すということは，エマソンがルソーに賛同しているということであろう。実際，エマソンの『自然』の中に，「人間は堕落している」という意味の言葉が何度か出てくる。

1838年のマーガレット・フラー（エマソンと親しかった超絶主義者の女性）に宛てた手紙には，「偉大な天才を先に見つけ，その価値をことばで書き記すのは何と難しいことか—ギボンであれ，ルソーであれ，誰であれ…」（この後，ゲーテのことを述べている）（*Vol.VII*, 92）と書くし，1839年には先程の「Man is good, but men are bad.」という言葉をまた記している（同，181)。

以上，エマソンが『自然』（1836年)，『自己信頼』（1841年)，『報償』（同年）といった代表作を書き上げるまでの期間，日誌やメモ帳の中でルソーのことを頻繁に取り上げ，コメントし，しかも彼をヨーロッパの主要な思想家の中

に位置づけていることが確認された。エマソンがどれほど強く彼を意識していたかを示すものと言ってよいであろう。

2．ふたりの自然論—その微妙な違い—

ルソーは『エミール』の Book1 で，人間の現状について，次のように言う。「万物を創る者（the Author of things）［＝神］の手を離れるときすべてはよいもの（good）であるが，人間の手に移るとすべてが悪くなる（degenerates）」「人間は（自然界の）すべてを悪く変形させる（disfigures）。人間は醜悪なもの（deformity），怪物（monsters）を好む」「偏見，権威，必然，実例，私達をおさえつけているいっさいの社会制度（social institutions）がその人［＝子供］の自然を絞め殺す」（7）。また，「ひとつのところに集まれば集まるほど，いよいよ人間は堕落する（corrupted）。…羊の群れのようにひしめきあっている（crammed）人間はすべて，すぐに滅びてしまうだろう」（30）とも。心のきれいな子供も，大人が作った社会がだめにするというのだ。それに対し，「自然人（natural man）は自分がすべてである」と自然人を讃え，「りっぱな社会制度（good social institutions）は，人間をこのうえなく不自然なものにする（denature）…」と言う（10）。

一方，ルソーの言葉として，「Man is good, but men are bad.」と書き留めたエマソンは，人間の現状をどう見たのであろうか。『自然』のまとめにあたる「展望（Prospect）」の章に，「人間は落ちぶれた神だ（a god in ruin）。童心こそ永遠の救世主であり，堕落した人間たち（fallen men）［を救ってくれる］」（37）と言う。さらに，後の 1844 年に発表する第2シリーズの『自然』の中でも，「偽り多い社会」（false society）のことを責めたあと，「人間は堕落している（fallen）。自然はまっすぐで（erect）…」（368）と言う。そして，人間は集まるより，孤独になることによって（天界の星の光や透明な大気のおかげで）「崇高なるもの（the sublime）［＝神］」の存在を覚知できるとする（5）。ルソーのいう「自然人」は自立した人間であったが，それはエマソンのいう「自己信頼（self-reliance）」の人間—自分と自分の感覚を信じら

れる人間—ということになろうか。エマソンはルソーの見方を継承しているといってよい。

次に，ルソーは自然の厳しさと子供の育て方について書く。「子供には，運命の打撃に耐え，…凍りつくアイスランドの中でも，マルタ島の焼けつく岩の上でも，生きることを学ばせなければならない。あなたがたは子供が死ぬことにならないようにと用心するが，死ぬときは死なねばならない」(12)。さらに,「自然を観察するがいい。そして自然が示してくれる道を行くがいい。自然はたえず子供に試練を与える（exercises)。…苦痛とはどういうものかを早くから教える。歯が生えるときは熱を出す。激しい腹痛がけいれんを起こさせる。とまらない咳がのどを詰まらせる。虫（worms）に苦しめられる。多血症が血を腐敗させる。…生まれる子供の半分は8歳にならずに死ぬ。試練（the tests）に合格すると子供には力がついている」(17)「これが自然の法則だ（nature's rule)。なぜそれに逆らおうとするのか。あなたがたは自然を矯正するつもりで，自然の作品をぶちこわしているのがわからないのか。…不順な季節，風土，環境，飢え，渇き，疲労に対して彼らの体を鍛練させる（harden）がいい」(18)「病弱な子供は…自分の体を守ることばかりを考えて，自分にとっても他人にとっても役立たずで…ひたすら死をまぬがれることを考えている」(24)「動物は病気のとき，何もいわずにがまんして静かにしている。人間ほど病弱な動物はいない」「動物は私たちよりも自然に適合した生活をしているから私たちほど病気にかからない」(26）と言う。

エマソンは『自己信頼』(1841年）の冒頭で,「幼い子供を岩の上に投げよ／彼を雌狼の乳で育てよ／鷹や狐とともに冬越しをすれば／活力と速力が手となり足となるであろう」(132）と言い，『自然』では，「(人間が神から疎遠なものになり）自然の中で異邦人(strangers)になると…鳥の歌が分からない。狐や鹿がわれわれを見て逃げ出し，熊も虎もわれわれを引き裂いてしまう。…植物の効用もほとんど分からない。…これは人間と自然との間にどれほどの不調和（discord）があるかを教えてくれているのかもしれぬ」(33)「人間は自然を相手に自分の力を半分しか使っていない。…安っぽい智恵で世界を

支配している。…彼の心は獣同様(imbruted)で自分のことしか考えぬ野蛮人だ(a selfish savage)」(37)と言う。このように,自然の厳しさを描く2人の表現はとてもよく似ている。しかし,ルソーは動物を自然に近いものとして讃えるのだが,エマソンは褒めるときと(上記最後の引用のように)けなすときがあることに気づく。

ところが,さらに読み込むと,2人の自然論に違いが表れてくる。

まず,ルソーの自然論であるが,これはBook4の「サヴォワの助任司祭の信仰告白」に詳しく書かれている。教会を不要とし,自分の心の声に忠実であれとするこの箇所は,教会を憤らせ,教会と結託した権力によってルソーは迫害の憂き目に遭い,『エミール』は焚書の処分を受けることになる。

ルソーは言う。「ある法則(certain laws)に従って動く物質はある英知(an intelligence)を私に示してくれる。…能動的でものを考える存在(an active and thinking being),…そういう存在者が存在するのだ。回転する天空の中だけでなく,私たちを照らしている太陽の中にも存在する。私自身のうちにだけでなく,草をはむ羊,空を飛ぶ小鳥,落ちてくる石,風に吹かれていく木の葉のうちにも存在するのだ」「私は世界には秩序(an order)があると考える」(247)「われわれの内なる感情(sentiment)に耳を傾けたとき…はっきりと感じられる秩序(the sensible order)は至高の英知(a supreme intelligence)を示すことになるのではないか。あらゆる存在の調和(harmony)と互いを維持しようとする見事な協力関係(concurrences)[があることが分かる]」(248)「宇宙には,他のすべてのものの共通の中心なるもの(the common center)があり,そのまわりにすべてのものが秩序づけられ,すべてが互いに目的となり手段となる。人間の精神(the mind)は,この無限の関連(this infinity of relations)のうちに茫然として自己を失う」「宇宙を動かし,万物に秩序を与えている(orders all things)この『存在者』(Being)を私は『神』("God")と呼ぶ」「私はいたるところでそのみわざ(His works)により神をみとめる(perceive)。私自身のうちに神を感じる(sense)。どちらを向いても,わたしのまわりに神が見える」(249)と。汎神論であり,自

然界の中に厳とした秩序，法則を感じ取ったルソーの興奮が伝わってくる。

エマソンの自然論を見てみよう。1833年9月3日の日誌に「(人が得るべき)最高の啓示」として，「神がすべての人の中にいる（God is in every man）ということ」（*Vol.IV*, 84）と記したエマソンであるが，「(人間の）知性（the intellect）はものの絶対的な秩序（the absolute order of things）を，神の心の内部にあるがままに探り出す」(12)「木の葉1枚，水の1滴，結晶体1個，一瞬の時間も全体（the whole）に関わっており，全体の完成にそれぞれひと役かっている。分子ひとつひとつが1個の小宇宙（a microcosm）であり，…」(22) と言うとき，ルソーが書いたのではないかと見まがうほどである。ところが，「それら（分子ひとつひとつ）が世界の似姿（likeness）を忠実に描き出す」と言い，「人間の手はトカゲ類のひれ状の足に似ており，建築は『凍った音楽』，ゴシック風の教会は『宗教を石で表した』と言え，楽音が蛇，牡鹿，象のような動きを描き，川は流れていくとき，その上を流れる空気に似ており，…生物はそれぞれお互いに形を変えているだけであって，違っている面よりも似ている面のほうが大きく，根本的な法則はすべて同一不変だ（one and the same)」。そして，その根源は『普遍的霊』(Universal Spirit）にあることを表しているという (22-23)。ルソー同様，根源の法則に言及するのだが，ルソーは調和，秩序，法則の面から「神」の存在を言うのに対し，エマソンはそれに加えて，自然界のもの同士の似通いの中に「統一性」(Unity)［＝法則性］(23) を感じ，「普遍的霊」「神」の存在を推し量る。

そして，エマソンはさらに一歩進める。神なるものを覚知した者はすでに「神」なのである，と。エマソンはその境地で『自然』を書いている。だから，「序」において，いきなり，「われわれは創造されたこの世界が完全であること（the perfection of the creation）を信頼していなければならぬ」(3）と言う。神は自分に似せて，完全な形でアダムを創ったのだから，その子孫であるわれわれはすべて，「神」になる資格をもっているのである。「われわれ（＝神）の問いかける疑問には，われわれ（＝神）が答えることのできないものはひとつもない」「ものの秩序がわれわれの心に目覚めさせた好奇心を，ものの

秩序はすべて満足させられる」（3）のだ。さらに，「人間のありのままの状況が彼の質問への答え」「人間は生のままに答えを行動で見せている（He acts it as life)」（3）とも言う。人間のありのままの姿，行動にすべての疑問への答えが表れているという大胆な論理である。そして，「むき出しの大地に立ち，一頭をさわやかな大気に洗われて，無限の空間の中に昂然ともたげれば—いっさいの卑しい自己執着は消える。…私にはいっさいが見え，『普遍者』の流れ（the currents of the Universal Being）が私の全身を走り，私は神の一部だ（I am part or parcel of God)」（6）となる。そして，「野や森が与えてくれる最大の喜びは，人間と植物の間の神秘的関係性を示唆してくれること」（6）「(強烈な光のもとで）美しくならないものはない。死体さえ美しさを備えている。…(自然界の)個々の形体も目に心地よいものばかりだ。(たとえば）どんぐり，ぶどう，松かさ，…ライオンの爪，蛇，蝶，貝殻，炎…」（9）と言うとき，彼は神の目で自然界を見ている。神が創ったものはすべて完璧であり，すべては美しい。恐れるものは何もない—というわけである。*7

また，ルソーにとって，自然は人間に試練を与え，自然界に行き渡る神性に気づかせる存在（＝厳しい教師）であったが，エマソンにとって自然は人間が自身の神性に気づくように導き，育む好意的な存在である。「獣，火，石，穀物が人間に奉仕する」「自然のすべての部分が人間のために役立とうと，たえまなく互いに協力し合う」（7）「神の慈愛（the divine charity）が…めぐりめぐって人間を育む」（8）と言い，さらには，「自然は薬効を備えていて(medicinal)，(調子を狂わせた人間の）本来の調子（tone）を回復してくれる。…自然を包む，永遠の静寂の中で，人間はおのれ自身を発見する」「朝風とともに膨張し，（自然と）ひとつになって呼吸する。…何と見事に，『自然』がわれわれを神さながらに変える（deify）ことか」（9）と言う。—ルソーが自然界に秩序や法則を発見した時の驚きや興奮を超えて，エマソンは（神とかわらぬ人間として，）自信と落ち着きを見せている。

そして，エマソンは自然界の秘密をひとつ明かす。自然界にあるものはす

べて，言語の役割を果たしており，自然の自己表現であり，「人間のもつ何かの精神的事象の象徴（a symbol of some spiritual fact)」(14) であると言う。「自然全体が人間精神の隠喩だ（a metaphor of the human mind)。精神の道徳法則（the laws of moral nature）が，さながら鏡の中で対面するように，（外部の）物質の法則に符号する」(17) というのだ。「怒れる人はライオン（の形で自然界に現れ)，狡猾な人は狐，頑強な人は岩，学識のある人は松明であり，子羊は無垢を現し，蛇は陰険な怨念，花はこまやかな愛情，光と闇は知識と無知…を表す」(14) と説く。この，“自然界の姿が人間の心の現れ”というエマソンの発想は，別府恵子氏も認めるように*8，西洋哲学史の中で「新鮮な」もの (43) である。これは，自然と人間が文字通りひとつであることを示しており，これを覚知した者こそが神ということになろうか。仏教の「依正不二論」*9に極めて近いものである。なお，エマソンが最初に自分の中に醜いものたちが住んでいると覚知したのは，1833年7月13日にパリの植物園を訪れたときで，陳列された動植物を見ながら「万物が，観察する人間の内面の何かの資質の形象である。早い話が，さそりと人間の神秘的な類似関係…私は私の内面にムカデ，わに，鯉，鷲，狐がいると感じる*10」(*Vol. IV*, 200) と書き記している。そして，「実に平然とにこやかに，人間精神（the mind）は自然界のさまざまな法則を次々に理解していく。…人間の洞察力が彼を気高くする。自然の美しさが彼の中で輝く」(20)「われわれの関わるすべてが，われわれに向かって道を説く（preach)」(21)「農場は物言わぬ福音（a mute gospel）であり，…もみがら，小麦，草木，胴枯れ病，雨，昆虫，太陽，…襲いかかる冬の雪…，すべては神聖な象徴（a sacred emblem）なのだ」(22) と今述べたエマソン思想を確認し，「海に打たれる岩が漁夫に堅忍を教え，風が嵐に乱れる雲を駆り立て，残った汚れをしらぬ深々とした青空から人間が平静さを学び，獣の演じる無言劇からどれほど勤勉と配慮と思いやりを学んだことか」(22) と，再び，自然が人間を慈しみ，訓育してくれていることを示す。—どちらもルソーにはなかった展開である。

3．ふたりの類似点

ふたりの思想の類似点はいくつもあるのだが，ここではひとつだけ挙げておきたい。すなわち，自然，あるいは宇宙がバランスを求めるという考えである。宇宙は「秩序」を維持するためにバランスの機能をもっている，と両者ともに説くのである。

ルソーはまず，「神は人間の力をごく限られたものにしているので，人間が自由を悪用する余地を残していても，（宇宙）全体の秩序を混乱させることにならない。…世界の組織（the system of the world）［＝秩序］を何ひとつ変えることにならない」(253) と述べて，宇宙のバランスの力を説く。宇宙は完全であり，人間が悪を行おうとすれば（＝秩序に背けば），はね返りがある。その悪事に気づかせるのが「良心」(conscience) であるとする。

そして，「自然が私たちにいろいろな必要を感じさせるのは，私たちの身を守るためである。体の痛みは体の調子が狂っているしるしであり，その狂いを直せという警告である」とし，「死はあなたが自分で作り出している病気を治す薬なのだ。自然はあなたがいつまでも耐え忍んでいることを欲しなかったのだ」と，またしても冷淡なことを言う。「原始的で単純な生活をしている人間は苦しみに悩まされることが少ない。彼らはほとんど病気をすることもなく，情念（passions）も感じないし，死を予感したり感じることもない。感じるときは有難いと思っている。…ところが，私たちは空想的幸福を求めて多くの現実の不幸を招いている」と，自然人でない人間の不幸の原因と結果を示しながら，「個々の悪はそれに苦しんでいる存在の感情のうちにだけある。…いまわしい進歩をやめ，私たちの不徳をあらためれば，何もかもよくなる」(254) と，堕落からの立ち直りを薦める。自然人になって，宇宙の「秩序」に従えというわけである。「秩序」を回復させようとする正義の叫びが「良心」である。

さらに，ルソーはいずれ思想犯として逮捕される危険を感じてか，「この世における悪人（the wicked）の勝利と正しい人（the just）の迫害…宇宙の調和のうちに見られるそういう腹立たしい不調和（a dissonance）は」と述べ，

「死によってすべてはふたたび秩序を回復する」(255) と言う。その人の魂は死なず，新たな幸福が始まるとし，「(死ぬことで肉体が無くなったあと) 純粋な精神にどんな不正を行うことができよう」(257) と展開する。悪は攻撃の相手がいなくなり，自ずから消えて無くなるという，極めてネガティヴな展開ともいえる。しかし，悪人について，「至高の正義 (supreme justice) は，…悪をもたらした罪を罰している。…偽りの成功のさなかにあってさえ，(悪からくる) 情念は君たちの悪行を罰している」と因果応報を説き，「地獄はすでにこの世において悪人の心のうちに存在する」(257) と言うとき，仏教でいう「因果俱時論」*11 と重なる。これをさらに身近な例をあげて解説・展開するのがエマソンである。

なお，「良心」については，「人間の心の底に正義と美徳の生得的な原理 (an innate principle) があり，…これに私は『良心』という名を与える」(261) とも述べ，プラトンのイデア論を受け継いでいる。そして，「幸福」とは，「偉大な存在者 (the great Being) [＝神] がうちたてた秩序を認め，この秩序を楽しむこと」「この善なる体系の中に自分が秩序づけられたと感じること」であり，「(社会の不正の中で) 自由を正しく用いることは，魂にとって功績 (merit) になり，報償 (recompense) になるのであって，魂は地上の情念と戦い，…変わることのない幸福への道を準備する」(265) とまとめる。

さて，エマソンは『報償 (Compensation)』の中で，まず，自然，そして宇宙自体がバランスよく出来上がっていると言う。すべてのものに極性 (polarity) があり，「作用と反作用，闇と光，潮の干満，雄と雌，植物や動物の吸う息と吐く息，…求心力と遠心力，…精神と物質，奇数と偶数，主観と客観，内と外，上と下」(156) 等々，どれも片方だけで存在できないのである。この属性が「松の葉１本」にも「麦ひと粒」にも「あらゆる動物の種族のそれぞれ」にも備わっている。「動物界の中にもとくに恵まれているものはなく，ある種の償いの作用で釣り合いを保っている (balances)」(156) と言う。「あらゆる過度は欠乏を，あらゆる欠乏は過度を引き起こす」とし，「甘味には酸味，善には悪がともなう。快楽を感じる能力はその濫用に同等の罰を科せ

られる」と展開する。

そして，善悪のあり方の議論になると，ルソーに似てくる。「自然は独占や例外を嫌う。…すべてを平面化しようとする（leveling）力がいつも働いていて，不遜な者（＝悪人），強い者，豊かな者，運のいい者を他の者と同じ地面に引きおろす」(157)「何千人を見下ろすほどの位置にいる人も，その高みにふさわしい義務がいろいろある（それを果たさないと暴動が起きる）」「悪を阻止する手立てが今は見えていなくても実はりっぱに存在しており，やがて姿が見えてくる」(158) と言う。そして，この現象は自然界のすべてに見られるのであり，「自然の中にあるものはどれもこれも，自然界のすべての能力 (powers) を含んでいる。どれもこれも，秘められた同一の材料 (one hidden stuff) でできている」(158) と言う。

このように，宇宙にはバランスの法則，報償の法則が存在していると言うのだ。「遍在（omnipresence）とは，神があらゆる苔やクモの巣の中に少しも欠けることなく，そっくり存在しているということだ。宇宙の価値はすべての点にまで入り込んでいる。善が入っていれば悪もちゃんと入っている」(158) と汎神論，自然法則論を改めて述べておいて，「あらゆる行為は報われる（Every act rewards itself)」「確実にあらゆる罪が罰せられ，あらゆる徳が報いられ，あらゆる不当が償われる」と因果応報論（retribution）を説く。そして「原因と結果，手段と目的，種子と果実は分離できない。結果はすでに原因の中で花咲き，目的は手段の中に，果実は種子の中に，あらかじめ存在している」(159) と見事に仏教的「因果俱時論」につなぐのだ。ルソーが言ったことをさらに分かり易く展開したと言える。

しかしながら，この報償論にもエマソン的な特徴が見出される。「愛と公正に背けば，不安によって罰せられる」(163)「徳は，悪に対峙することを万物に強いる」(165)「殉教者からその名誉を奪い取ることはできない」(167) という展開は，ルソーそっくりであるが，「病気，犯罪，貧窮などあらゆる災いも，結局は恩人であることが分かる」「善人は弱さや欠乏でさえ味方につける」(166)「あらゆる事実の底に潜む深遠な治癒力（the deep remedial

force) がある」(171) といった前向きの言葉は，自然を好意的に感じ取れるエマソンでなければ紡ぎ出せない言葉であろう。

おわりに

本稿は最初に，エマソンの日誌を通して，エマソンがどれほどルソーを意識していたかを確認した。ときに共鳴し，ときに反発しているようす，またルソーをヨーロッパの主要思想家の中に入れていることが明らかになった。エマソンは，ルソーの作品の中でも，とくに，『エミール』と『告白』から大きな影響を受けたようである。

ふたりの主要作品を読み比べてみると，自然論，自己信頼思想，報償論，直感主義，人間中心主義，教会不要論等に，両者の思想の近似性がうかがえるが，今回は，「自然論」と「報償論」に焦点をあて，ルソーとエマソンの類似点，相違点を論じてみた。

まず，両者が示す＜秩序・法則＞としての「神」のとらえ方が非常によく似ていた。ただし，そこには微妙な違いも存在しており，エマソンは自然界のすべてのものが互いに似通っている点を“法則”性のひとつに挙げている。そしてさらには，「自然界の姿が人間の心の現れである」とする，仏教でいう「依正不二論」の視点さえ見せるのだ。また，エマソンは「(人間が) 神になる」とも言う。この発想も，実は仏教的である（仏教には「成仏」—仏になる—という発想がある)。この点に関して，ルソーは「自分の中に神がいる」とまでしか言っていない。なお，自然界および宇宙が＜秩序・法則＞に則って存在するという考え方も，実は仏教にあることを付け加えておきたい。*12

次に，ルソーは自然を人間にとって厳しい「試練」の場ととらえていたが，エマソンは（そういう側面も少しあったが）むしろ慈愛と「訓育」の場ととらえている感が強い。ふたりの執筆当時の境遇の違いがその違いを生んだのであろうか。ルソーは過激な反教会主義者であり，教会と結託した権力による迫害の危険を感じていたと思われる。実際，『エミール』を見ても，「悪」

と「正義」についての言及が多く，そして「正義」が敗れたときの死後の救済にまで触れている。しかし，エマソン作品には「悪」という語はそれほど目立たない。自分を神と同等に見る「自己信頼」の境地に達した彼にとって，（たとえ，牧師を辞任し，教会から離れることになっても）宇宙のすべては好意的で，あらゆる事象は幸福とつながっていたのかもしれない。この傾向は，後の 1844 年に発表される第２シリーズの『自然』にさらに強く出ており，自然はその魔法の力（spells, enchantments）と治癒力で，人間を慈しみ，育て，蘇生させるものとして扱われることになる。

さらに２人の類似点として，とくに，自然・宇宙が「バランス」「報償」を求めるという考え方を挙げておいた。そして，ルソーが「因果俱時論」と呼ばれる仏教的視点を垣間見せており，それを分かり易く，具体的に展開しているのがエマソンであると述べた。先に述べた「依正不二論」その他と合わせ，ふたりがこういった仏教的発想をどこで身につけたのかが気になるところである。

紙幅の関係で述べられなかった両者のさらなる類似点，相違点については，稿を改めて論じたい。

注

1．市村尚久氏はエマソンの『人間教育論』の解説において，エマソンの教育に関する著作を通読する中で，「自然」を中心においたルソー的な教育観を見出したが，エマソンがルソーに言及する箇所はなかったとしている。
2．英語訳は，本学文学部元教授（フランス文学）Olivier Urbain 氏にお願いした。
3．William H. Gilman, Alfred R. Ferguson, Merrell R. Davis の３氏による編集である。
4．*The Correspondence of Carlyle and Emerson, 1834-1872, Vol.1*（Project Gutenberg）の中で，２人が出会って２日後，カーライルは母への手紙にエマソンを “one of the most lovable creatures” と書き，夫人も「この片田舎に来ていただいた，ノアの洪水以来のすばらしいお客様」と讃えている。出会いから１週間後，エマソンは友人の手紙に，カーライルのことを “one of the most simple and frank of men” と呼び，「とても誠実で，（一緒にいると）自分の心が豊かになった気がする。こちらが知らないことがあっても，知ったかぶりをしなくてもよい人物」と書いている。

5．カーライルによると，ルソーはフランスでは「崇拝」され，イギリスでは「汚物(offscouring)」扱いを受けていたとのこと。カーライル自身は彼を「神格化されたり，捨て去られたりする，高邁で気高いとさえ思えるのだが，社会的に不適格な(misarranged）人間」「高い理想と低劣な行動［を合わせもつ人間］」と位置づけている。(Cumming, 402)

6．やはり，Olivier Urbain 氏訳。

7．エマソンは 1838 年にハーバード大学の卒業式で行った『講演（An Address)』の中でも,「もし心が正しければ, その人は神であり（is he God）…」(*Writings*, 64)「(善の力をもつ人間は）その力により，自分自身が神（the Providence）となり…」(同，65）と言っている。

8．「対応（correspondence)」思想と呼ばれている。

9．「依正不二論」は，中国・天台宗妙楽（711-782）が法華経玄義釈籤第 14 に解説した思想で,「正報（生活主体である自己)」と「依報（生活環境である自然)」とは観念のうえでは区別できるが，実際には分離することのできないものであり，両者の関係は相依相関性をなしているとする。(『仏教哲学大辞典』第 3 版（創価学会 2000 年）P.157)

10. 日本語訳は，ボスコ，マイアソン，池田対談『美しき生命　地球を生きる　哲人ソローとエマソンを語る』P.151 より借用した。

11.「因果俱時論」は，釈尊の法華経に説かれる。原因とされるものとそこから生ずる結果とされるものの間に時間的経過が見られず，一体に同時に具わっていることをいう。(上記『仏教哲学大辞典』第 3 版 P.113)

12. 釈尊の法華経に「仏の成就したまえる所は, 第一希有難解の法なり。唯, 仏と仏と, 乃し能く諸法の実相を究尽したまえり」とあり，“法” の実相を覚知した者が仏とされている。(『妙法蓮華経並開結』（創価学会 1976 年）P.154)

参考文献

Buell, Lawrence: *Emerson* (The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, and London, England, 2003)

Cumming, Mark (ed): *The Carlyle Encyclopedia* (Fairleigh Dickinson University Press, Madison, Teaneck, 2004)

Emerson, Ralph Waldo: *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson* (Modern Library Edition, New York, 1992)

———: *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson, Vol.I-XIV* (The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1960-78)

Richardson Jr., Robert D.: *Emerson The Mind on Fire* (A Centennial Book, University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London, 1995)

Rousseau, Jean-Jacques: *Emile* Introduction, Translation and Notes by Allan Bloom (Basic Books, Inc., Publishers, New York, 1979)
エマソン『人間教育論』市村尚久訳・解説（世界教育学選集 57, 明治図書出版, 1971 年）
エマソン『エマソン論文集（上・下)』酒本雅之訳（岩波文庫, 1973 年）
ルソー『エミール（上・中)』今野一雄訳（岩波文庫, 1973 年）
ロナルド・ボスコ, ジョエル・マイアソン, 池田大作『美しき生命　地球を生きる哲人ソローとエマソンを語る』（毎日新聞社, 2006 年）
別府恵子／渡辺和子『新版 アメリカ文学史』（ミネルヴァ書房, 2005 年）